

博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査） 二木 博史



学位申請者 宮脇淳子

論文名 モンゴル帝国以後の遊牧王権：モンゴル・オイラトの対立抗争とチベット仏教の受容

【審査結果】

本学位請求論文は、15世紀から18世紀のモンゴル・オイラト関係、チベットの各宗派の対モンゴル、対オイラト政策を、モンゴル語、チベット語、マンジュ語、漢語、ロシア語等で記録された史料にもとづいて実証的に研究したものだが、とくに17世紀のジュンガル王国の実像、ハルハ・モンゴルの活仏ジェブツンダンバ・フトクトとチベット仏教ゲルク派の関係について、通説にかわる、独自の重要な結論をみちびきだすことに成功し、当該の時期の内陸アジア史研究に多大な寄与をしたとみとめられる。

テーマの重要性、利用された一次資料の質、先行研究に対する理解、総合的な分析能力、結論の独自性のいずれにおいても、本論文は卓越している。

よって審査委員会は、論文審査と学力の確認の結果にもとづき、全員一致で、学位申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当だと、判断した。

審査には、本学の教授二木博史（主査）、白井佐知子教授、岡田和行教授、林佳世子教授のほか、学外から田中克彦氏（一橋大学名誉教授）が参加した。

【論文の概要】

本論文は、本文（225ページ）、参考文献、附図、系図等から構成される。全230ページ。本文の構成は、以下のようである。

はじめに

第1章 日本における15-17世紀モンゴル研究史

第2章 モンゴル史料の分析：モンゴル年代記とオイラト年代記の誕生

第3章 モンゴルとオイラトの抗争の始まり

第4章 モンゴル史料が語るモンゴルとオイラト

第5章 モンゴルへのチベット仏教の伝播

第6章 17世紀露清の狭間のハルハ・モンゴル

第7章 ジェブツンダンバ・フトクト伝説の成立

第8章 「ジュンガル・ハーン国」論争

第9章 最後の遊牧帝国ジュンガル：チベット仏教王国

第10章 モンゴル系遊牧民の独立の消失：トルグートのイリ帰還 おわりに

第1章では、モンゴル年代記の記述の信憑性や、漢籍のつたえる情報の信頼性に言及しつつ、「ダヤン・ハーン論争」や「ジュンガル・ハーン国論争」を中心に、先行研究の整理をおこなっている。

第2章では、代表的なモンゴル語史料16種、オイラト語史料6種のほか、清朝のマンジュ語・漢語史料8種、チベット語史料8種をとりあげ、代表的テキスト、史料価値についてのべる。

第3章は、13世紀のはじめのオイラトの出現、モンゴル帝国以降のモンゴルとオイラトの対立、オイラト帝国の誕生と崩壊（15世紀中葉）の記述にあてられている。

第4章では、モンゴルとオイラトの年代記をもとに、それぞれの構成集団の起源をあきらかにしたあと、16世紀におけるモンゴルとオイラトの対立抗争をのべる。

第5章では、モンゴル帝国時代にさかのぼってモンゴルの支配者とチベット仏教の各宗派の関係をのべ、16世紀のアルタン・ハーンによる仏教受容、そのあとのハルハ・モンゴル、オイラトへの仏教伝播を年代記史料にもとづいて記述している。

第6章では、「1691年に清に服属するまえから、ハルハは“3ハーン部”にわかれ、活仏ジェプツンダンバ・フトクトによって指導されていた」とする通説を批判し、清朝への服属以前にはハルハ・モンゴル人は伝統的な左右翼への帰属意識がつよく、フトクトは全ハルハを指導していたわけではないとのべる。

第7章では、1688年にハルハ・モンゴル人が清朝の庇護をもとめた際に、「ハルハの諸侯の会議で、おなじ仏教を信仰するという理由で、ジェプツンダンバ・フトクトがロシアではなく、マンジュ人皇帝が支配する清の保護をもとめるよう主張し、みながしたがった」という伝説が誕生した背景を分析し、ジェプツンダンバ・フトクト2世の死の直後にひらかれたハルハの諸侯の会議（1758年）の内容が、あやまりつたえられた可能性を指摘している。さらに、チベット語史料をもとに、「ダライ・ラマからジェプツンダンバ・フトクトの称号をさずかった」という通説を否定している。

第8章では、ガルダン・ハーン以前のジュンガルの指導者ハラフラ、バートル・ホンタイジ、セングのもっていた権力をモンゴル語、ロシア語の史料にもとづいて検証し、若松寛氏の諸論文や、同氏が依拠したソ連人学者ズラートキン著の『ジュンガル・ハーン国史』でのべられたような「ジュンガル・ハーン国」は存在しなかったことを、実証している。

第9章では、オイラトの支配者の使用したハーン号の性格を考察し、チベットのダライ・ラマからジュンガルのガルダンにあたえられたハーン号が、「4 オイラトを率いる盟主」を意味する称号だったと解釈し、「ハーン」とジュンガルの支配者の本来の称号「ホンタイジ」とを区別する。さらにガルダン、ツェワンラブタン、ガルダンツェリンの時代のジ

ューンガルの中央アジア支配を記述する。

第10章では、1630年にヴォルガ河流域に移住したトルグートとロシアの関係、ジュールンガルの滅亡後のトルグートのイリ地方（現在は新疆ウイグル自治区）への帰還がのべられている。

【論文の評価】

本論文は、日本における内陸アジア史研究のなかでも重視されてきた、ポストモンゴル帝国時代のモンゴル史を、オイラトとモンゴルの対立をひとつの軸にし、チベットの宗教政策、清、ロシアの対外政策と関連づけて、主要な政治的事件に焦点をあてて記述した作品である。遊牧民たるモンゴル人のこのこした史料は相対的にすくなく、このテーマの研究には、モンゴル語（モンゴル文字、トド文字）のもの以外に、チベット語、ロシア語、漢語、マンジュ語などの言語で記録された史料を、複数の視点から多重的に検討する作業がもとめられるが、著者は、この容易ではない作業をなしとげえたという点を、まず確認しておく必要がある。

本論文で評価すべ点を具体的にのべると、第1に、統一・分裂・同盟・再統一といったサイクルをたどる「遊牧民政権」のメカニズムをしめしつつ、15世紀から18世紀のオイラト史を体系的に記述したことをあげることができる。とくに17世紀の4オイラトを構成していたジュールンガル、ホシュート、トルグート等の諸集団の関係をあきらかにし、ソ連の代表的モンゴル史研究者ズラートキンや日本のジュールンガル史研究者若松寛の、「ガルダン登場以前のジュールンガルの役割を過大評価する見方」のあやまりを指摘し、この時期のオイラト史をほぼかきかえた功績は強調されなければならない。

第2に、ハルハ・モンゴルの宗教指導者ジェブツンダンバ・フトクトとチベットのダライ・ラマとの関係について、チベット語の史料の記述をもとに、代表的なジェブツンダンバ・フトクト伝のあやまりをただし、ゲルク派(ダライ・ラマ)の勝利、チョナン派(もともとジェブツンダンバ・フトクトの属した宗派)の没落という背景のなかでの、ジェブツンダンバの行動、チベット側の対応をえがき、ハルハに複数の宗派が並存していた状況をあきらかにしたことは、モンゴル史研究へのおおきな貢献である。

第3に、ハルハ・モンゴル人がジュールンガルのガルダン・ハーンの軍隊にやぶれ、清朝の保護下にはいる際に、「ジェブツンダンバ・フトクトの決断が決定的な役割をはたし、ロシアではなく、清の援助をもとめた」という通説を再検討し、左右翼にわかれるハルハの内部構造が当時はまだ維持されていたこと、ジェブツンダンバは基本的に左翼の王侯たちに対し影響力をもっていたことをあきらかにし、ハルハ・モンゴル史のわくぐみに修正をくわえたことも、たかく評価できる。

審査委員からだされた主要な批判、質問は、以下のものである。

(1) 本論文は当該の時期の政治史に集中しているが、社会経済史、法制史などからのア

アプローチを併用することによって、支配の変遷だけでなく、モノや文化のながれをもしめすことが可能になり、社会の諸階層のひとびとの歴史が再構成できるのではないか。

- (2) 本論文では、具体的な事実関係が詳細にのべられており、それらはもちろん、たいへん有益だが、今後は「遊牧民政権」のメカニズムの抽象化・理論化をおこない、「一般原則」をあきらかにし、世界史における遊牧民政権の意味をさぐる作業ももとめられるのではないか。
- (3) 各章のトピックはそれぞれ重要で、結論も妥当とみとめられるが、各章のあいだの相互関係が、ややよわい部分がある。
- (4) 本論文の中心をなす部分は、1990年代の前半までに基本的に執筆されたため、博士論文として提出する際にある程度の加筆がおこなわれてはいるものの、最新の研究や近刊の史料が、十分に反映されていない場合がある。

これらの批判、質問に対する宮脇淳子氏の答弁は、具体的かつ体系的で、みずからの研究の到達点と今後の展望を十分に自覚していることが、確認された。

論文の内容と学力の確認の結果を総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、上記の結論に達した。